

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 18 日現在

機関番号：62618

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00588

研究課題名（和文）修辞機能と脱文脈化の観点からの日常談話テキスト分析

研究課題名（英文）Analysis of Everyday Discourse from the Perspective of Rhetorical Function and Decontextualization

研究代表者

田中 弥生（Tanaka, Yayoi）

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・研究系・プロジェクト非常勤研究員

研究者番号：90462811

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、日常生活におけるさまざまな談話の分析に、「修辞機能」と「脱文脈化」という観点の活用を提示することである。分析手法として「修辞機能分析」の分類法を用いて、国立国語研究所で構築された「日本語日常会話コーパス」「現代日本語書き言葉均衡コーパス」に収録されているデータ、児童作文データ、高齢者談話の「共想法」データ、国立国語研究所で構築中の「多世代会話コーパス」に収録される予定のデータ、などを分析した結果、話題によって「修辞機能」「脱文脈度」に特徴が見られることが明らかになり、さらに個人の差異や子供の年齢による特徴があることがうかがえた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

我々は、話す時、書く時に、無意識に脱文脈度の異なる表現を用いており、その違いは感覚として捉えていると考えられる。また、子どもは目の前や自分のこと、身近なことから話し始め、その後、脱文脈化した話題や表現を使えるようになる。本研究で示した分類法では、文の主語や主題と時制などから、発話機能・時間要素・空間要素を分類し、その組み合わせによって修辞機能を特定し脱文脈度を知ることができる。これによって、感覚的だった脱文脈度の観点からの分析が明示的に行えるようになる。すでに児童作文では指導への応用が検討されているが、日常のコミュニケーション分析など、様々な応用の可能性がうかがえる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to present the use of the perspectives of “rhetorical function” and “decontextualization” in the analysis of various discourse in daily life. Using the taxonomy of “rhetorical function analysis”, we analyzed data from the “Corpus of Everyday Japanese Conversation” and “Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese” constructed by the National Institute for Japanese Language and Linguistics(NINJAL), data on children's compositions, data on elderly people's discourse, and data to be included in the “Multi-generational Conversation Corpus” under construction at the NINJAL. As a result of analyzing the data, it became clear that the “rhetorical function” and the “decontextualization index” were characterized by the topic in common with the data, and that there were characteristics depending on individual differences and the age of the children.

研究分野：社会言語学

キーワード：修辞機能 脱文脈度 談話分析 テキスト分析 発話機能 日常会話

## 1. 研究開始当初の背景

研究開始当初、日本語の大規模コーパスが構築され、大量の日本語を分析する環境が整っていた。例えば、国立国語研究所が中心となって構築された『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(Maekawa et al. 2014, BCCWJ)では、媒体(書籍、雑誌、白書、ブログ等)、内容(小説、ノン・フィクション等)、主題(工学、芸術、美術等)の異なりをもつテキストが大量に収録され、コーパスを用いた定量分析が行えるようになった。また国立国語研究所では「大規模日常会話コーパス」プロジェクトによって『日本語日常会話コーパス』(小磯ほか 2017, CEJC)が構築中で、従来にはない自然な会話が均衡性を考慮して収録され始めていた。これらのコーパスに対して、さまざまなアノテーションを付与することによって、さらに有益な分析が可能になることが考えられた。

本研究に関わる研究代表者らは、それまで「修辞ユニット分析」の分類法(佐野 2010、佐野・小磯 2011)によって、談話(テキスト)分析を行ってきた。修辞ユニット分析は、選択体系機能言語理論における英語会話の談話分析手法の一つである Rhetorical Unit Analysis (Cloran 1994, 1999) を日本語に適用したものである。テキストの意味単位を特定するものだが、その過程においてメッセージ(節によって具現される意味)に空間(主語)と時間(述部の時制や副詞)の2軸から修辞機能と脱文脈化指数を特定する。脱文脈化とは、メッセージの書き手・話し手のいる場・いる時、すなわち「いま・ここ・わたし」とそのメッセージの表現との空間的・時間的距離のことで、例えば空腹な状況について「私は今お腹がすいている」「いま・ここ・わたし」に近い、個人的、現場的な、文脈化した表現)とも「人はお腹がすくものだ」「いま・ここ・わたし」から遠い、一般的、普遍的な、脱文脈化した表現)とも表現できる。我々は直感的にこの違いを理解できるが、修辞ユニット分析はこの違いを修辞機能及び脱文脈化指数として捉えることができるものである。

研究代表者らは、本研究開始までに、「修辞ユニット分析」の分類法の認定基準の検討を行いながら、主に、インターネット上の談話(Yahoo!知恵袋の投稿や、アットコスメのクチコミなど)や、紙媒体テキストの評価(児童・生徒作文と教師の評価、自治会勧誘チラシとそのわかりやすさ評価)と修辞機能及び脱文脈度の連関を分析してきた。

Cloran, C. (1994) *Rhetorical Units and Decontextualisation: An Enquiry into Some Relations of Context, Meaning and Grammar*. Ph.D. dissertation, University of Nottingham, Nottingham.

Cloran, C. (1999) Contexts for Learning. In C. Frances ed. *Pedagogy and the Shaping of Consciousness: Linguistic and Social Processes*, London: Continuum International Publishing, pp. 31-65.

Maekawa, Kikuo, Makoto Yamazaki, Toshinobu Ogiso, Takehiko Maruyama, Hideki Ogura, Wakako Kashino, Hanae Koiso, Masaya Yamaguchi, Makiro Tanaka, and Yasuharu Den. (2014) *Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese. Language Resources and Evaluation*, 48: 2, 345-371.

佐野大樹(2010)「日本語における修辞ユニット分析の方法と手順 ver. 0.1.1: 選択体系機能言語理論(システムック理論)における談話分析(修辞機能編)」, <https://researchmap.jp/kotonoha/資料公開/>.

佐野大樹・小磯花絵(2011)「現代日本語書き言葉における修辞ユニット分析の適用性の検証 - 「書き言葉らしさ・話し言葉らしさ」と脱文脈化言語・文脈化言語の関係 -」『機能言語学研究』6, 59-81.

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、コーパスなどのデータを利用して、日常生活における様々な談話(テキスト)を分析する観点として、修辞機能と脱文脈化度の分類が活用できることを提示することである。

本研究の主となるのは、「修辞ユニット分析」の手順によって談話(テキスト)データを分類することであった。しかし、分類を進める中で、もともと英語の談話分析手法を日本語に適用していることによると思われる課題を早急に解決する必要が生じた。そこで、談話(テキスト)データの分類を進める一方、日本語文法の枠組みによる分類手順の策定も本研究の目指すところとした。

## 3. 研究の方法

研究の方法を以下に示す。

- (1) 「修辞ユニット分析」の分類法の手順によって、談話(テキスト)データを分類する。  
(3.1.)

- (2) 分類に迷うなどの課題を抽出する。
- (3) 分類法の検討を行い、新たな分類手順を提示する。(3.2 及び 4.1)
- (4) 「修辞機能分析」の分類法の手順によって、談話(テキスト)データを分類する。(3.3.)
- (5) 話題や目的の異同と、修辞機能及び脱文脈度の関連を確認する。(4.2.)
- (6) 従来の談話分析における発話機能・談話機能タグとの関連を確認する。(4.3.)

### 3.1 「修辞ユニット分析」の分類法による談話(テキスト)データの分類

分析対象には、『日本語日常会話コーパス』(小磯ほか 2023)に格納されている(分析時は当該コーパス構築中のため、格納予定であった)家庭での食事場面の談話や、手順を説明する成人同士の談話、職場における取引先との談話、作業遂行時における幼児と母親の談話の他、市政ニュース映画ナレーション、「共想法」という会話支援手法による高齢者のグループでの談話、児童作文データなどを用いた。

小磯花絵・天谷晴香・居關友里子・臼田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉・渡邊友香(2023)『日本語日常会話コーパス』設計と特徴『国立国語研究所論集』24, 153-168.  
大武美保子(2011)『介護に役立つ共想法』東京：中央法規出版。

### 3.2 「修辞機能分析」の分類法の提示

上述のように、本研究の主となる目的は、コーパスなどのデータを利用して、日常生活における様々な談話(テキスト)を分析する観点として、修辞機能と脱文脈化度の分類が活用できることを提示することであった。しかし、「修辞ユニット分析」の分類手順によって分類を行う中で、分析結果に影響のある課題があることから、分類手順の再検討にも重点を置き、日本語文法の枠組みによって検討を行い、「修辞機能分析」として研究代表者が博士論文にまとめた(田中 2022)。分類の流れなど、基本的に「修辞ユニット分析」を踏襲しているが、「修辞ユニット分析」の元の英語談話分析 Rhetorical Unit Analysis が修辞ユニットの分析を行うものであったのに対して、「修辞機能分析」では、分析単位であるメッセージ(日本語文法の節に概ね該当する)ごとの修辞機能と脱文脈化指数によって分析を行うことから、「修辞機能分析」と名付けた。

田中弥生(2022)『修辞機能と脱文脈化の観点からの日本語談話分析』東京大学博士論文(未公開)。

### 3.3 「修辞機能分析」の分類法による談話(テキスト)データの分類

分析対象には、『日本語日常会話コーパス』に格納されている打ち合わせ時の談話、手順を説明する談話における本題の会話と雑談、『日本語日常会話コーパス』の後のプロジェクトで構築されている『子ども版日常会話コーパス』(小磯ほか 2023)に格納される予定の、親子の協働作業場面における談話や、家庭での食事場面における親子の談話、その他に、「共想法」による高齢者のグループでの談話や、児童作文データ、などを用いた。

小磯花絵・天谷晴香・居關友里子・臼田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・藤越・西川賢哉(2023)『子ども版日本語日常会話コーパス』の構築』言語資源ワークショップ発表論文集, 1, 103-108.

## 4. 研究成果

### 4.1. 新たな分類手順「修辞機能分析」

「修辞機能分析」では、「修辞機能」を「話し手書き手が発信する際に、言及する対象である事態や事物、人物等を捉え表現する様態を分類し概念化したもの」と定義した。また、「脱文脈度」を「発話がコミュニケーションの場「いま・ここ・わたし」にどの程度依存しているか」の程度を表す概念としている。「修辞ユニット分析」の分類手順による作業上の課題を確認した上で、分類手順である①分析単位「メッセージ」への分割と種類の特定、②「発話機能」の認定、③「時間要素」と「空間要素」の認定、のフェーズごとに検討を行い、「修辞機能分析」の分類手順を提示した。なお、「時間要素」は「修辞ユニット分析」では「現象定位」、「空間要素」は「中核要素」とされていたものだが、検討により名称を変更している。それぞれについて分類を修正した上で、それらの分類の基準を提示した。一部を以下に述べる(田中 2022 より抜粋)。

#### ① 分析単位「メッセージ」への分割と種類の特定

「修辞ユニット分析」でのメッセージの種類の変更し、「拘束；意味的従属」と「拘束；

形式的従属」の判断が不明瞭であった点について、先行研究（南 1974、1993、野田 1996、仁田 1995、大堀 1996、2000 など）を踏まえ、「従属」と「並列」に分類する基準を従属度の観点から従属節の種類で明示した。

修辞ユニット分析と修辞機能分析のメッセージの種類に対応と分析対象／非対象

メッセージの種類		
修辞ユニット分析	修辞機能分析	分析対象／非対象
位置付け	→ 定型句類	非対象
拘束；意味的従属	→ 従属	非対象(単独では分析せず)
拘束；形式的従属	→ 並列	対象
自由	→ 主節	対象

② 「発話機能」の認定

発話機能の分類名称に変更はないが、「提言」の分類には、現場性(南 2003)を考慮することを提案した。

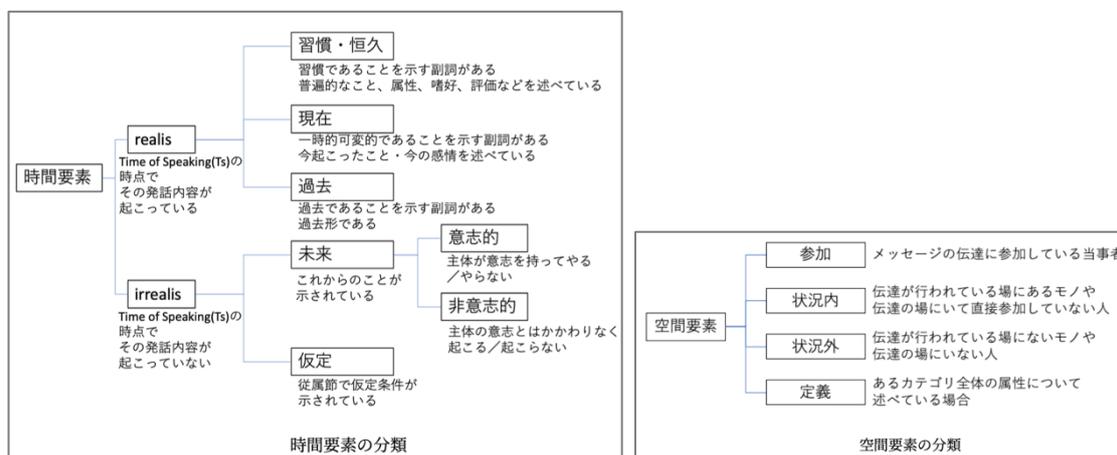
発話機能の分類 (佐野 2010)

	提言	命題
交換されるもの	品物・行為	情報
交換における役割		
与える	(a) 「提供」 起こしましょうか	(c) 「陳述」 起きた
要求する	(b) 「命令」 起きろ	(d) 「質問」 起きましたか？

③ 「時間要素」と「空間要素」の認定

時間要素については、分類を修正した上で、判断に迷うケースについて例をあげて提示した。

空間要素は、「修辞ユニット分析」では「中核要素」で、“主語”(英語では Subject) が該当するとされていたが、日本語では主語の定義があいまいなために中核要素の認定が揺れることがあった。「修辞機能分析」では、例えば、主語と主題が明示されている場合、いずれも明示されていない場合、など例をあげて示し、何を空間要素とするか、また、その分類についても修正した上で、判断に迷うケースについて例をあげて提示した。



大堀壽夫(1996)「言語的知識としての構文:接続構造のパラメータ」、『認知科学』, 3, (3), 3\_7-3\_13.

———(2000)「言語的知識としての構文:複文の類型論に向けて」, 坂原茂(編)『認知言語学的发展』, ひつじ書房, 東京, 281-315.

佐野大樹(2010)「選択体系機能言語理論を基底とする特定目的のための作文指導方法について」『専門日本語教育研究』, 12, 19-26.

仁田義雄(1995)『複文の研究』, くろしお出版, 東京.

野田尚史(1996)『「は」と「が」』, くろしお出版, 東京.

南不二男(1974)『現代日本語の構造』, 大修館書店, 東京.

———(1993)『現代日本語文法の輪郭』, 大修館書店, 東京.

———(2003)「文章・談話の全体的構造」, 『文章・談話』, 朝倉書店, 東京.

4. 2. 話題や目的の異同と修辞機能及び脱文脈度の関連

児童作文の分析(田中ほか 2021)では、テーマの異なる児童作文の修辞機能と脱文脈化指数の出現頻度を確認して、(1) テーマによる違いと学年による違いを検討し、(2) 特徴的な作文について修辞機能と脱文脈化指数の現れ方を検証することによって、児童作文の修辞機能と脱文脈化指数による評価の可能性を検討した。分析の結果、テーマによって時制にかかわる特徴がみられ、学年層による違いとしては、低学年において、使用する修辞機能に偏りがあることがうかがえた。

共想法による高齢者のグループ談話データと、談話の後に書かれた小作文の分析(田中・小磯ほか 2023)からは、テーマ(「好きなもの」「近所の名所」「新しく始めること」)によって話し言葉(共想法における「話題提供」パート(独話))と書き言葉(共想法で課せられる小作文)に共通する修辞機能がある(表内の「両者に共通」部分)ことが明らかになった。ただし、その一方で、テーマによって話し言葉と書き言葉それぞれで特徴的な修辞機能があることもわかった。

	好きなもの	近所の名所	新しく始めること
「話題提供」に特徴的	観測 08 説明 13		状況内回想 03 説明 13
両者に共通	自己記述 07	状況外回想 10 説明 13	計画 04
「小作文」に特徴的		状況内回想 03	観測 08

家庭での親子5人の会話の分析(田中・江口ほか 2023)では、父の顎関節症による顎の痛みの話題と、長男の突然の発話から始まる稲妻の熱さの話題では、用いられる修辞機能が異なることが明らかになった。

上述の児童作文及び共想法談話では与えられたテーマによるものであったのに対して、話者たち自身がその場で取り上げた話題内容の場合にも用いられる修辞機能が異なることが改めて確認された。

また、目的のある談話における、本題とそれ以外の会話の特徴を修辞機能と脱文脈度の観点から明らかにすることを目的とした分析(田中 2023)では、発話内容から本題とそれ以外の複数の分類項目を抽出した上で、修辞機能分析の分類法によって特定した修辞機能と脱文脈度について、クロス表と多重対応分析によってその特徴を検討した。その結果、手順を説明する本題の会話に特徴的な修辞機能があることがわかり、また、本題以外の発話でも、本題に関連があると分類されたものでは、本題と似た傾向の修辞機能の特徴が見られることがわかった。一方、本題とは異なる傾向が見られたものについて雑談と呼ぶのであれば、本題と異なる特徴が見られた。

このように、話題内容や、目的と修辞機能及び脱文脈度には関連があることがうかがえる分析結果が得られている。

田中弥生(2023)「手順を説明する談話における本題の会話と雑談の特徴 —修辞機能と脱文脈度の観点から—」『社会言語科学会第47回研究大会発表論文集』155-158.

田中弥生・江口典子・小磯花絵(2023)「家庭での食事場面における親子会話の脱文脈度の観点からの分析」『言語資源ワークショップ発表論文集』1, 329-339.

田中弥生・小磯花絵・大武美保子(2023)「共想法による話し言葉・書き言葉における修辞機能の特徴—テーマとの関係に着目して—」『言語処理学会第29回年次大会発表論文集』1356-1360.

田中弥生・佐尾ちとせ・宮城信(2021)「児童作文の評価に向けた脱文脈化観点からの検討」『言語処理学会第27回年次大会発表論文集』750-755. (言語処理学会第27回年次大会優秀賞受賞)

#### 4.3. 従来の談話分析における発話機能・談話機能タグとの関連

代表者の博士論文では、ザトラウスキー(1993)の勧誘談話分析のデータの一部を修辞機能分析で分類し、ザトラウスキーの示した“発話機能”の分類と修辞機能分析の関連を検討した。ザトラウスキーにおける“発話機能”は「修辞機能分析」の「発話機能」2分類とは異なり12種に分類されている。修辞機能分析の「発話機能」で「提言」に分類されるものがザトラウスキーでは細かく分類されている。一方、ザトラウスキーでは主に「情報提供」と「情報要求」に分類されているものは、「修辞機能分析」では発話機能「命題」に分類され、さらに時間要素と空間要素の組み合わせから修辞機能と脱文脈化指数が特定される。分析の結果、ザトラウスキーの分類法と修辞機能分析を組み合わせることによって、より詳細な分析が可能になることが示された。

これ以外の従来の談話分析の分類タグとの関連については、検討を継続していく。

ザトラウスキーポリー(1993)『日本語の談話の構造分析:勧誘のストラテジーの考察』, くらしお出版, 東京.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計25件（うち査読付論文 13件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 19件）

1. 著者名 田中弥生・ 柏野和佳子・ 加藤祥	4. 巻 -
2. 論文標題 書籍の文体と修辞機能の分析のパイロットスタディ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 言語資源ワークショップ2023発表論文集	6. 最初と最後の頁 142-150
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15084/0002000122	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 田中弥生・ 江口典子・ 小磯花絵	4. 巻 -
2. 論文標題 家庭での食事場面における親子会話の脱文脈度の観点からの分析	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 言語資源ワークショップ2023発表論文集	6. 最初と最後の頁 329-339
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15084/0002000141	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 田中弥生・ 小磯花絵・ 江口典子・ 大武美保子	4. 巻 98
2. 論文標題 共想法による高齢者談話における修辞機能と設定テーマとの関係	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 人工知能学会 言語・音声理解と対話処理研究会 (SLUD) 資料	6. 最初と最後の頁 25-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11517/jsaislud.98.0_25	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Amatani, Haruka	4. 巻 -
2. 論文標題 Temporal orders of utterance and performance in online piano lessons: Imperative, interrogative and declarative as directives.	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 The 29th International Conference on Collaboration Technologies and Social Computing (CollabTech 2023)Poster Presentation Papers.	6. 最初と最後の頁 37-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中弥生・小磯花絵	4. 巻 100
2. 論文標題 親子の食事場面での話題内容と脱文脈度	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 人工知能学会 言語・音声理解と対話処理研究会 (SLUD) 資料	6. 最初と最後の頁 59-64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11517/jsaislud.100.0_59	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田中弥生・柏野和佳子・加藤祥	4. 巻 -
2. 論文標題 書籍の文体情報と脱文脈度の関連 客観度との対応のパイロットスタディ	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 第48回社会言語科学会研究大会 発表論文集	6. 最初と最後の頁 367-370
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 水澤祐美子	4. 巻 9
2. 論文標題 日本人大学生英語学習者の母語能力と英語力の関係：修辞機能の視点から	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 日英言語文化学会	6. 最初と最後の頁 39-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐尾ちとせ・宮城信・田中弥生	4. 巻 1
2. 論文標題 修辞機能分析を活用した作文指導	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本語習熟論研究	6. 最初と最後の頁 140-158
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中 弥生	4. 巻 1
2. 論文標題 打ち合わせにおける談話構造の修辭機能からの分析	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 言語資源ワークショップ発表論文集 = Proceedings of Language Resources Workshop	6. 最初と最後の頁 297 ~ 308
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15084/00003745	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田中 弥生・小磯 花絵・大武 美保子	4. 巻 -
2. 論文標題 共想法による話し言葉・書き言葉における修辭機能の特徴-テーマとの関係に着目して-	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 言語処理学会 第29回年次大会 発表論文集	6. 最初と最後の頁 1356-1360
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田中弥生	4. 巻 -
2. 論文標題 手順を説明する談話における本題の会話と雑談の特徴 修辭機能と脱文脈度の観点から	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 社会言語科学会第47回大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 155-158
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 天谷晴香	4. 巻 -
2. 論文標題 オンラインで共在する：美容形ユーチューバーによるGet Ready With Me動画を例に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 2021年度日本認知科学会第38回大会論集	6. 最初と最後の頁 877-882
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 天谷晴香・田中弥生	4. 巻 6
2. 論文標題 マルチアクティビティにおける作業の優先と会話の補填：共同調理場面・他者化粧場面を例に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語資源活用ワークショップ発表論文集	6. 最初と最後の頁 268-279
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15084/00003501	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田中弥生・小磯花絵・大武美保子	4. 巻 22
2. 論文標題 脱文脈化の観点から見た共想法に基づく高齢者談話の分析	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国立国語研究所論集	6. 最初と最後の頁 137-155
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15084/00003518	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田中弥生・小磯花絵・大武美保子	4. 巻 -
2. 論文標題 共想法談話のテーマと修辞機能の関連についての分析	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 言語処理学会 第28回年次大会 発表論文集	6. 最初と最後の頁 1439-1443
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Mizusawa, Y.	4. 巻 2(2)
2. 論文標題 Lexicogrammatical and Semantic Development in Academic Writing of EFL Learners: A Systemic Functional Approach.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Modern Journal of Studies in English Language Teaching and Literature	6. 最初と最後の頁 105-107
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田中弥生・小磯花絵	4. 巻 -
2. 論文標題 脱文脈化の観点からみる職場における取引先との談話の特徴	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 言語資源活用ワークショップ2020	6. 最初と最後の頁 257-266
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15084/00003165	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田中弥生・藤越・小磯花絵	4. 巻 -
2. 論文標題 作業遂行時における幼児と母親の会話のスタイルシフトと脱文脈化	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 社会言語科学会第45回大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 172-175
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中弥生・小磯花絵・大武美保子	4. 巻 -
2. 論文標題 共想法談話の脱文脈化観点からの検討	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語処理学会第27回年次大会(NLP2021)	6. 最初と最後の頁 750-755
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田中弥生・佐尾ちとせ・宮城信	4. 巻 -
2. 論文標題 児童作文の評価に向けた脱文脈化観点からの検討	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語処理学会第27回年次大会(NLP2021)	6. 最初と最後の頁 569-573
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 天谷晴香	4. 巻 4
2. 論文標題 美容院におけるマルチアクティビティ：鏡越しの視線と発話	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語資源活用ワークショップ発表論文集	6. 最初と最後の頁 330-336
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15084/00002584	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田中弥生・小磯花絵	4. 巻 4
2. 論文標題 家庭での幼児の発話の修辞機能：脱文脈化の観点からの検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語資源活用ワークショップ発表論文集	6. 最初と最後の頁 106 - 118
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15084/00002559	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田中弥生・浅原正幸・小磯花絵	4. 巻 -
2. 論文標題 手順説明談話における脱文脈化の様相	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 言語処理学会大26回年次大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 720-723
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田中弥生・春木良且	4. 巻 -
2. 論文標題 川崎市政ニュース映画ナレーションにおける脱文脈化程度の検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 言語処理学会大26回年次大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 877-880
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Haruka Amatani and Yayoi Tanaka	4. 巻 -
2. 論文標題 Annotation and preliminary analysis of utterance decontextualization in a multiactivity.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 22nd Conference of the Oriental COCOSDA International Committee for the Co-ordination and Standardization of Speech Databases and Assessment Techniques (O-COCOSDA)	6. 最初と最後の頁 159-163
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計30件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 田中弥生・ 柏野和佳子・ 加藤祥
2. 発表標題 文体と修辭機能の分析のパイロットスタディ
3. 学会等名 言語資源ワークショップ
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 田中弥生・ 江口典子・ 小磯花絵
2. 発表標題 家庭での食事場面における親子会話の脱文脈度の観点からの分析
3. 学会等名 言語資源ワークショップ
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 田中弥生・ 小磯花絵・ 江口典子・ 大武美保子
2. 発表標題 共想法による高齢者談話における修辭機能と設定テーマとの関係
3. 学会等名 人工知能学会 言語・音声理解と対話処理研究会 (SLUD) 第98回研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 田中弥生
2. 発表標題 児童の作文における表現の脱文脈化観点による可視化
3. 学会等名 日本語文法学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 田中弥生・小磯花絵
2. 発表標題 親子の食事場面での話題内容と脱文脈度
3. 学会等名 人工知能学会 言語・音声理解と対話処理研究会 (SLUD) 第100回研究会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 田中弥生・柏野和佳子・加藤祥
2. 発表標題 書籍の文体情報と脱文脈度の関連 客観度との対応のパイロットスタディ
3. 学会等名 第48回社会言語科学会研究大会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 田中弥生・居關友里子・田中真理子・小磯花絵
2. 発表標題 幼稚園における教諭主導の相談会話：脱文脈度の観点からの分析
3. 学会等名 シンポジウム「日常会話コーパス」IX
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Amatani, Haruka
2. 発表標題 Temporal orders of utterance and performance in online piano lessons: Imperative, interrogative and declarative as directives.
3. 学会等名 The 29th International Conference on Collaboration Technologies and Social Computing (CollabTech 2023).
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 天谷晴香
2. 発表標題 日常会話におけるレシピ・テリング
3. 学会等名 シンポジウム「日常会話コーパス」IX
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 田中弥生
2. 発表標題 打ち合わせにおける談話構造の修辭機能からの分析
3. 学会等名 言語資源ワークショップ2022
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田中弥生・小磯花絵・大武美保子
2. 発表標題 共想法による話し言葉・書き言葉における修辭機能の特徴 テーマとの関係に着目して
3. 学会等名 言語処理学会第29回年次大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 田中弥生
2. 発表標題 手順を説明する談話における本題の会話と雑談の特徴 修辭機能と脱文脈度の観点から
3. 学会等名 第47回社会言語科学会研究大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 田中弥生
2. 発表標題 親子の協働作業場面における会話の脱文脈度
3. 学会等名 シンポジウム「日常会話コーパス」VIII
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Amatani, Haruka
2. 発表標題 Temporal relationships between speech and gesture: "Be going to" expressions in Makeup Tutorials on YouTube.
3. 学会等名 International Society for Gestural Studies (ISGS) 9. (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 天谷晴香・田中弥生
2. 発表標題 マルチアクティビティにおける作業の優先と会話の補填：共同調理場面・他者化粧場面を例に
3. 学会等名 言語資源活用ワークショップ2021
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田中弥生・小磯花絵・大武美保子
2. 発表標題 共想法談話のテーマと修辞機能の関連についての分析
3. 学会等名 言語処理学会第28回年次大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田中弥生
2. 発表標題 会議の談話の脱文脈化の観点からの分析
3. 学会等名 シンポジウム「日常会話コーパス」VII
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 天谷晴香
2. 発表標題 YouTube動画タイトルの語彙遷移に関する予備的分析：インフルエンサーが示す視聴者とのピア性
3. 学会等名 人工知能学会第91回言語・音声理解と対話処理研究会(JSAI SIG-SLUD)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Mizusawa, Y.
2. 発表標題 A Multimodal Analysis of Hidden Gender Inequality in Primary English Textbook in Japan.
3. 学会等名 The 3rd Linguistic Society of the Philippines International Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田中弥生・小磯花絵
2. 発表標題 脱文脈化の観点からみる職場における取引先との談話の特徴
3. 学会等名 言語資源活用ワークショップ2020
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 田中弥生・小磯花絵
2. 発表標題 取引先との打ち合わせ談話における脱文脈化観点からの特徴
3. 学会等名 人工知能学会第91回言語・音声理解と対話処理研究会(JSAI SIG-SLUD)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田中弥生・藤越・小磯花絵
2. 発表標題 作業遂行時における幼児と母親の会話のスタイルシフトと脱文脈化
3. 学会等名 社会言語科学会第45回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田中弥生・小磯花絵・大武美保子
2. 発表標題 共想法談話の脱文脈化観点からの検討
3. 学会等名 言語処理学会第27回年次大会(NLP2021)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田中弥生・佐尾ちとせ・宮城信
2. 発表標題 児童作文の評価に向けた脱文脈化観点からの検討
3. 学会等名 言語処理学会第27回年次大会(NLP2021)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田中弥生・小磯花絵
2. 発表標題 家庭での幼児の発話の修辞機能：脱文脈化の観点からの検討
3. 学会等名 言語資源活用ワークショップ
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 天谷晴香
2. 発表標題 美容院におけるマルチアクティビティ：鏡越しの視線と発話
3. 学会等名 言語資源活用ワークショップ
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田中弥生・春木良且
2. 発表標題 川崎市政ニュース映画ナレーションにおける脱文脈化程度の検討
3. 学会等名 言語処理学会第26回年次大会(NLP2020)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 田中弥生・浅原正幸・小磯花絵
2. 発表標題 手順説明談話における脱文脈化の様相
3. 学会等名 言語処理学会第26回年次大会 (NLP2020)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Haruka Amatani and Yayoi Tanaka
2. 発表標題 Annotation and preliminary analysis of utterance decontextualization in a multiactivity.
3. 学会等名 22nd Conference of the Oriental COCOSDA International Committee for the Co-ordination and Standardization of Speech Databases and Assessment Techniques (O-COCOSDA)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yumiko Mizusawa
2. 発表標題 An Analysis of Lexicogrammatical and Semantic Features in Academic Writing by Japanese EFL Learners
3. 学会等名 Hawai ' i International Conference on English Language and Literature Studies (HICELLS 2020)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	水澤 祐美子  (Mizusawa Yumiko)  (10598345)	成城大学・文芸学部・准教授    (32630)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	浅原 正幸  (Asakara Masayuki)  (80379528)	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・言語資源開発センター・教授    (62618)	
研究分担者	天谷 晴香  (Amatani Haruka)  (80806159)	神奈川工科大学・教育開発センター・基礎教育講師    (62618)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	比留間 太白  (Hiruma Futoshi)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関